

昭和56年（一九八一）

1月×日 朝七時発、山口市と防府市で出版の打ち合わせをして昼過ぎには帰徳。おなじ山口市まで行くのなら、一日かけてゆっくりと、大学などに先生方を訪問してまわればいくらでも仕事はあるのに、どうしても目先の用だけに追いまわされている。この貧乏性は治りそうにもない。午後、今回発送のパンフの原稿を清書して印刷所へ渡し、夜行列車で上京。

1月 日 冬枯れの神田古書街は、例のビニ本専門店と、折から開催中の古書展だけが大きいわい。上京のたびに感じるのは、東京都の人口は全国の約一割に過ぎないのに、専門書の九割近くは神田を中心に動いているのではないかということである。その中で山口県関係の史書を漁るわけだが、これがまた大海の一滴で、たまに見つけても、明治41年版の徳富猪一郎著『吉田松陰』に二万円の正札がついていたりする。

ともあれ、山口県史料に関するかぎり、い

まや全国の九割以上はこのマツノ書店を中心として動いているように思われる。

1月×日 今回の上京では、毛利元敬氏、亀井茲建氏、大久保利謙氏と、維新の元勳（毛利敬親、亀井茲監、大久保利通）の末裔に、出版のことでそれぞれ初めて会っていただきたいへんお世話になった。世が世なれば、気安く会える人たちではないのだが……。

1月 日 一月も中旬を過ぎると買入れがふえる。今日も大島町から鉄道便で本がたくさん届いた。殊勝にも「代金は要りません、お役立て下さい」と書いてあるが、こちらも商売なので、適正な評価をして送金する。梅が咲き、日脚も伸びてきた。春は近い。

昭和57年（一九八二）

1月 日 古書部を担当しているパートの一人が急病で倒れ、12月からこのQ生が代りに出ている。おかげで店は充実してきたが、出

版の仕事はお手上げだ。

青申の決算期も迫っており、二月に刊行予定の「マツノ通信」も五月に延期せざるを得まい。一年以上のブランクになるので、せめて「火車日誌」だけでもつくって、お得意様に近況をお知らせしよう。まさに「火の車」なのだから。

1月×日 防府市で社会科学関係の本をクルマに四杯も買う。売り主は四十歳くらいの自営業者だが、この読書量には脱帽。それにしても、これが郷土誌や趣味などの本だったらなあ……。

社会科学の本はもうからないのである。

1月 日 『毛利輝元卿伝』は好評で、早くも目標の五百冊目が売れた。これで印刷代や印税を支払うことができそうだ。

松江市の先輩、ダルマ堂書店の主人から、本書について「内容、製本ともまったく申し分ないが、ケースがお粗末」との評あり。まさにその通り。日本の出版界の常識からすれば、内容、価格の割に質素なこの紙箱はアンバランスかもしれない。しかし本というものは、誤植がなく、読みやすく、そして造本が

堅牢であればそれで充分なのだ。とくに史料集などはそうだと思う。この合理主義こそ、毛利輝元以来の長州の伝統でもあり、広く世界に目を向けても、外装に必要以上の華美を競っているのは日本だけではあるまいか。

1月×日 『昭和十年 徳山市街図』 出来。毎日新聞をはじめマスコミ、タウン誌のすべてにとり上げられ、PR効果は抜群。同じように話題となった昨年末の『防長・味の春夏秋冬』にくらべ、この地図は百分の一以下の気苦労ですんだ。出版にもいろいろあるものだ。2月 日 『出版ニュース』からの依頼で、今月末に池袋の西武百貨店で開催されるブックフェア「全国ふるさとの本まつり」についての原稿を書く。

2月×日 『於杼呂我中 亀井茲監伝』 出来。簡素ながらも堂々とした風格の仕上がりで、こんなのを見ると、先の『毛利輝元卿伝』も、厚いケースにすれば良かったかなとも思う。

それにしても、昨年十月の『脱隊暴動一件 紀事材料』以来、復刻二点を含め五点の出版が相次いだ。不況時にもかかわらず何とか売れ、何度目かの危ない橋をどうにか渡りきつ

たらしく、お得意の皆様には三拝九拝の思いである。しかし、手間不足に加えどうやら眼も上がってきたようだ。人をふやせばやれるという仕事でもなく、また使う柄でもない。春は近づいたが、出版の仕事はこれから冬眠に入ろう。

2月20日 大市と西武のブックフェアのため今夜から上京する。

4月×日 倉庫を整理し、出版物の在庫を大量に廃棄する。売れ残りとはいえ懸命に作った本、いわばわが分身であり、感無量。売るための工夫がたりないと言われればそれまでであるが、販売や保管にともなう出費などをよくよく考えての結論なので、悔いはない。

クルマ2杯半、千八百冊余り、定価にして五百万円分のスクラップ価格は、何と大枚三千円也。見果てぬ夢はさめた、といえ、悲槍にきこえようが、なぜか胸がすつとしたのである。

4月 日 二か月も出版の仕事をさぼっている。出版さえしなければ、自分の時間はあるし、金の苦労はなく、まさに日々は天国。ボケてしまいうそである。本業のいなか式古本

屋も、そのむかし二十年間も続けてきたあのせわしない貸本屋でさえ、出版に比べればそれこそ「赤子の腕をねじる」ような仕事に思える。どうも出版の仕事が自分に合わないのか、それとも、地方出版のハンデがそれほど大きいのか。

4月×日 池袋西武百貨店でのブックフェア「全国ふるさとの本まつり」からの返本あり。

三七〇冊送本して、一七冊売れたので三割強だ。このフェアでの売れゆき予想は野球の打率くらいとの下馬評だったので、よく売れた方なのだろうが、返本の整理にはうんざりだ。

付随しておこなわれた、毎日新聞(都内版)の広告に対する読者アンケートでは、掲載45点の地方出版物のうち、小社の『防長・味の春夏秋冬』が「欲しい本」の第二位に入っていた。

4月 日 富山と名古屋から、古本屋の経営にも関心をもつ出版業者が泊まりがけで見学にくる。そついえば山口、広島両県でも、脱サラ等による新規業者が目立つようだ。

4月×日 このところ全国ほとんどの古本屋

が「スーパーマン」に変身し、どこへ行って
もこの話でもちきりである。定期的にスーパー
等へ出店し、即売をするのだが、店よりはる
かに効率が高いので、県内でも流行し、目下
どの店もスーパーでの陣取り合戦たけなわ。
いやおうなしに対応を迫られている。もちろ
ん、今さら資本の論理にまきこまれたくはな
い。あくまでも流れに抗し、スーパーを眼中
にせず、小粒でもピリリとした店づくりに徹
したいと思っている。

5月 日 文書館へ『防長風土注進案』のこ
とで今日もお百度。「前館長の伝言でもあり、
早く許可をおろしたいのだが、職員間の意見
調整のため、いまましの時間を……」とおだ
やかにいわれると何も言えない。

5月×日 新しい刺激を求めて、名古屋、松
本、東京へ四日間の駆け足行脚。

6月 日 待つ（マツノ）にも限度がある。
今日は『注進案』の件で二度も山口行。まさ
に夜討ち朝駆けで、ついに教育長まで話をもち
こみ、ようやく先がみえてきた。それにし
ても、長い人では二十年、小社が復刻の要請
をはじめからでも八年間、よくも待たされ

たものではある。そういえば、この「マツノ
通信」は、昨年（の二月）以来だ。待つだけで
なく、待たせるのも小社の特技なのだろうか。
6月×日 「マツノ通信」（第15号）を発送し
て一週間目。変わりばえのしない古書目録だっ
たにもかかわらず、八割以上が売約になった。
よく売れるのは嬉しいが、また同じ本を集め
なくてはならず、そのための労力を考えると、
「めでたさも中くらいなり」というところか。
ふつうの商品は、よく売れるほど安く仕入れ
ることができるのに、古書、とくに稀覯本は
その反対なのだから。

6月 日 例によって、礼状ひとつ添えるこ
となく大急ぎに送本してしまい、（それでも十
日以上かかった）お得意の皆様には、まこと
に申しわけなく思っているが、それ以上につ
らいのは、抽選に漏れた人への「断わり状」
である。県立図書館からの大量注文を優先し
たため、一冊も入手できなかった人も多かつ
たのだ。今回の目録の注文ベスト5は、
『毛利氏小事典』 『岩国藩御家人帳』 『萩
藩分限帳』 『もりのしげり』 『萩藩閥閥
録』であった。やはり基本史料は強い。

6月×日 山口市で県の古書籍商組合総会。
長いあいだ組合長をやってこられた第三書房
の友広保一氏が老齢のため引退され、代わっ
て若輩のQ生が選ばれた。これまでどんな会
にも所属せず、まして「長」と名のつくもの
には全く縁のない道ばかりを歩いてきたのに、
年の順でもあり仕方があるまい。

7月 日 いなかの古本屋らしくもなく、「六
時閉店」を厳守し、六時前にはほとんどのお
客が自発的に店から出ていくほどであったが、
夏でもあるし、もう三十分だけサービスする
ことにした。禁酒と同じで、いつまで続くか
はわからない。（注・やはり一週間しか続かなか
った）

7月×日 新潮社から今秋刊行される『生涯
を賭けた一冊』に、小社の近刊『吉田松陰』
がとり上げられ、著者の紀田順一郎氏が取材
のため来徳、一泊された。

こういふ碩学せきがくとの一献はまさに価千金。出
版をつづけていくための貴重なエネルギー源
となる。

7月 日 『防長風土注進案』の復刻許可がよ
うやく下り、いよいよ正式にスタートである。

今のところ次のようなことを考えている。

九月には予約募集のパンフを配布し、十月に締切。明春、全22巻を一括刊行する。

価格は11万円のサービス特価。もちろんローンも準備する。

予約限定出版、つまり予約者にしか頒布しない。

山口県が全国に誇る文化遺産の復刻は、超零細出版社にとっていささか重荷ではあるが、何とか成功させたい。

7月×日 『吉田松陰』 出来。しかしよく見ると、左右頁の印刷面の位置の違うところがある。製本が雑なのだ。こんなものを小社の名前で出すわけにはいかない。また、復刻を許可してくれた岩波書店にも悪い。直ちに印刷所へ連絡、刷りかえてもらうことにした。したがって発送は八月中旬になる。乞御了解。

8月 日 『注進案』 いよいよ復刻」の記事が新聞に大きく出たとたん、七、八年ぶりに「売りたい」との声あちこち。もっと早ければ30万円以上にも買えたのに、「六日の菖蒲 十日の菊」ではどうにもならない。

8月×日 刷り替えの『吉田松陰』がようやく

出来た。今度こそ、どこへ出しても恥ずかしくないほど完璧で、印刷所に最敬礼。あとで岩波版の原本をよく見ると、左右頁の印刷面の上下ズレは処々にあり、うかつにもそれをそのまま拡大複製したから目立ってたわけで、製本上のミスではなかった。「岩波信仰」ここに極まれり。

8月 日 『注進案』の推薦文を北海道大学の田中彰氏にお願いする。「このところ貴店へは何度も登場しているし、別の人を紹介するから」と辞退されたが、本書と田中氏との浅からぬ因縁を考えると、やはりここはご無理を願う以外にない。

8月×日 夏休みも終わった。いなか古本屋の夏は旅行者や帰省客などでけっこう忙しい。子供も多く、マンガの在庫が底をつく季節でもある。それにしても、このところ怠慢のため店にあまり出していない。成りゆきまかせの乱れた店で、遠路はるばる来ていただいたお客様には申しわけないこと。

9月 日 『注進案』を出すとは、だいぶ金がかまりましたね」と嬉しいことを言ってくれた人がいる。

しかし残念ながら、地方での超零細出版で金がたまるほど世の中あまくはない。十年前のように、二百万円以上かかる出版をするのに、パンフ発送の切手代にも事欠くというほどではないけれど、今回の出版費二千万円に対し、資金はゼロに等しい。

あるのは、わずかばかりの信用と人一倍の心意気、そしてこの十年間磨きぬいた特技。そう、お得意様のフトコロをあてにする技術だ。商売は他人の力ネ。無手勝流の綱渡りなればこそ知恵もわき、スリル満点、楽しさ百倍……、と言いたいところだが、さてどうなることやら。

9月 日 『防長回天史』の26冊揃いを売りたいと宇部から電話あり、すわ新種（未定稿）発見とばかり駆けつけたが、大正十年刊の修訂版二組と端本二冊であった。それにしても専門外の人がこの厚い本を二組、60年間も保存しているとは、さすが山口県。

9月×日 奇しくも朝毎両紙の読書欄へ同時に『吉田松陰』の紹介が出て、全国各地より注文電話多数。岩波からの依頼で中野好夫氏へも送本。匿名書評を書いて下さるとか。

10月 日 コンピューターで本をつくる時代

というのにまだ複写機もない出版社なんて、ギネスブック物だと思っていたところ、ようやく格安品を買い、つまり自社でコピーをとることができるようになって、実に便利なものだと感嘆しきり。

10月×日 先回のアンケートで要望の多かった『防長史学』を復刻すべく、編者の一人でもあった、山口県地方史学会会長の石川卓美氏に立派な解題を書いていただき、同じく名誉会長の三坂圭治氏と徳山市の長田昇氏から、それぞれ原本の提供を受け、準備万端整った。

10月 日 十年前、古本屋への転業に際し免許をとり、初めて買ったクルマ。小社の象徴でもあったオレンジ色のフォルクスワーゲンも、二十五万キロを過ぎた頃から故障がちになり、ついに買い換えを決意。これで「9044」というすごいナンバーとも、無事故のままお別れである。

「火車」返上への願いを込め、こんどは淡黄色の国産ワゴン車にした。何とか早く青いクルマにしたいものだ。（その前に、金と黒のデラックス車がお迎えに来なければであるが：

…）

10月×日 年一回のレクリエーションで、店を休み、全員で信州八ヶ岳へ登る。霧氷、カラマツの黄葉、野生カモシカ等が印象に残った。

11月 日 静岡大学教授の田村貞雄氏による『山口県自由民権運動史料集』刊行の話まとまる。

明治期の山口県人名事典として重宝な井関九郎著『現代防長人物史』の索引を文書館の広田暢久氏に作成していただき、これでも使いやすいかたちで復刻できるようになった。

11月×日 『防長風土注進案』の締切日。ついに四百セットを越え、まだ増えている。「予約特価11万円」の重い球は、不況の逆風をついて、九回裏ならぬ出版九年目の、逆転満塁場外ホームランとなった。あとは印刷所の好準備を待つのみ。

11月 日 県内の文学碑、野生植物、そのほかいろいろな出版の話を持ちこまれるが、今のところ小部数発行の史料物だけで手いっぱいなので、みんな見送っている。

12月×日 『注進案』のクレジット購入希望者、百数十名の信用調査を月販会社がおこなった結果、一人の欠格者もなかった。ふつう一割以上は出るものらしい。小社が、これまで数十回におよぶ手探りの通信販売で、全国から精選し尽した、それこそ文字通り純金のお得意様ばかりなので、当然のこととはいえ、ほんとうに有難い。

昭和58年（一九八三）

2月 日 秋田・無明舎の安倍甲氏、松本郷土出版社の高橋将人氏、日新広告社の崎村茂雄氏はるる来徳。一緒に、博多の葺書房、宮崎の鉾脈社を訪れ、東京までつきあう。各地で歓待され、いのちの洗濯。いなか者が生まれて初めて飛行機に乗った、記念すべき旅でもあった。

3月×日 毎日新聞学芸部の林邦夫氏、取材のため来店。毎日新聞徳山支局長の橋詰隆康氏とも旧知の仲で、まずは一献、たのしい夜

となる。

3月 日 出版の仕事で上京。ついでに神田、本郷をめくり、防長と名のつく本をあさる。相変わらず品薄のうえ高い。『防長風土注進案』には、まだ38万円也の正札がついている。

4月×日 『注進案』の復刻ようやく完成。春休みで忙しい店をそっこのけにして、限定番号を記入のため、全員で防府の印刷所へ。

講堂ほどの広さの部屋いっぱい、全22巻が六百冊ずつ積み重ねてある。ケースも別なので、たいへんな量だ。その中からセットを揃え、一冊ずつ番号を入れていく。

4月 日 『注進案』の仕上げは、印刷所の社員も含め約十名で、一週間もかかった。番号を入れ、ダンボール箱につめて発送するだけでこんなに手間どるとは……。

4月×日 紀田順一郎氏より近刊『とつておきの本の話』の贈呈をうける。三年前、初めてこの「防長火車日誌」のことを「週刊読書人」に紹介していただいた文章が載っている。
4月 日 昨夕、北海道大学の田中彰氏来店。松阪ならぬ「徳山の一夜」となり、出版者冥利につきる思い。今日は一緒に山口市へ三坂

圭治氏を訪問。

4月 日 七年間いた女子事務員が結婚のため退職するので、お別れパーティ。後釜はパートにした。夫婦とパート三人とで、家賃三十万円の古本屋と年六本の出版を続ける。「火車」に乗って、地方における古本・出版業の限界を追求していくこのスリル。

4月×日 中国新聞などの地方紙に連載されている、小林一博氏のコラム「ほんの周辺」に、拙文「出版五原則」が紹介された。

5月 日 雨の祝日。レジの数は二六〇人を越えた。貸本屋時代の名残か、徳山という場所柄なのか「女子供」のお客も多く、客数だけは、全国どこの古本屋にも負けない。この大衆路線こそ、マツノ書店のもう一つの顔といえよう。

出版はもちろん、古書業界も「不況」らしいが、要するに、これまで恵まれすぎていたのだ。時流に逆行した、どん底経営の貸本屋を二十年も続け、いわば地獄からはい上がったきた者に不況はない。
5月×日 沖縄国際大学の玉野井芳郎氏わざわざ来店、激励のお言葉を賜わる。

5月 日 週一回の山口行。この九年間に七十点余を刊行したのに、わが徳山市在住の著者、編者は一人もなく、山口市が多い。印刷所は、下関、防府、または県外とこれまた遠い。

「どうして徳山のようなところへ出版社ができたのか、おもしろいことですね」と、先年亡くなられた宮本常一氏がよく言っておられたのを思い出す。山口県には、他県のような「東京」はないのだ。

5月×日 貸本屋時代の同志、東京の大竹正春氏来店。平凡社の新しい『世界大百科事典』の「貸本屋」の項目を執筆中の由。戦後二世代目の代表として「マツノ読書会」の名前をあげたいとか。

5月 日 広島市で古本屋の市。情報収集も兼ね、隔月出席している。最近、マンガ、文庫、雑本の束ばかりのさばってきた。
5月×日 家永三郎、色川大吉、遠山茂樹、という豪華メンバーに推薦文をいただいている話題の書『山口県自由民権運動史料集』がようやく最終校まできた。なにしろ編者の田村貞雄氏（静岡大）は、この三月から一年間、

インドネシア大学へ客員教授として滞在中なので、連絡に手間どる。

5月 日 夕方五時には古本部のパートを帰らせ、代わって自分が店に出る。店番ぎらいのせいもあって、数年前から「六時閉店」を厳守している。五月末ともなれば、繁華街はまだ宵の口。お客を追い出すようにして閉めるので、評判は良くないだろう。

でも、早朝から懸命に働いており、夕方くらいはきちんと自分の時間をとつても、バチは当たるまい。仕事だけが人生ではないのだから……。

12月 日 防府市で人文系の学術書を、本棚ごと、二トン車に一ぱい買う。百〇十万円也。このところ信用がついたのか、大口の買入れは、まず預かって帰り、ゆつくりと評価させていただくことが多く助かる。それにしても地元のわが徳山市で、これまで大口の買入れが一度もないのはなぜか。小社の出版物七十余点の編著者に、当市の在住者が皆無なのと同じ理由だろうか。

12月×日 朝日新聞の読書欄「本のうちごと」で「図書館七不思議」を紹介している。先の

毎日新聞の『三角点』とあわせ、今年の掉尾ちようびを飾るにふさわしい記事。肝心の図書館界からはついに何の反応もなかった……これぞ八つ目の不思議か？

12月 日 今春は『防長風土注進案』の復刻、秋には全国図書館大会での「七不思議」と、いささか乗り過ぎの感あり。来年は「脚下照顧」をモットーに、店内の充実、本紙の定期刊行など、地味な作業に万全を期したい。その『注進案』のために他の出版を控えたので、刊行延期になった本も多く、関係者各位におわびの手紙を書いている。

12月×日 二度目のPR「年末のおしらせ」のパンチがきいたのか、『大内氏実録』『周防国府の研究』とも、発行部数の七割をこえる予約となり、売切れは時間の問題だ。両書とも、古書価の二〜三割の値段で入手できるので、当然といえばそれまでだが……。

昭和59年（一九八四）

1月4日 初売り。パートはまだ来ないので一日中Q生が店番。正月は買入れはなく、マンガ、文庫、小説だけで平日の何倍も売れ、忙しい。ロボットでもやれそうな仕事にいささか腹も立つけれど、「お客様は神様」なのだ。

1月 日 ある大学教授の自費出版に、「金銭的な迷惑は一切かけないから、貴社の名前を貸してほしい」と申し込まれた。良い本なので有難いことではあるが、例によってお断わりする。ふつうの地方出版社なら喜んで応じるところだ。

考えてみれば、名前は貸さない、自費出版は引き受けない、出版記念パーティは一度もやらない、書店経由の販売もしない、とないづくしの出版社だ。

1月×日 防長史関係の便覧類の編纂では特に定評のある、山口市の田村哲夫氏に依頼してあった『萩藩給禄帳』よつやく脱稿。「分限帳」と「無給帳」を合わせた長州藩士すべての人名録。

安政二年と明治三年の給禄を比較対照することができるとも画期的。四月には刊行できそう。

1月 日 突然、税務署から聞きとり調査にきた。最低限の記帳だけはしているので心配ない。

対話の一部を紹介すると、

署員「昨年の総売上げと総仕入れは、どれくらいですか」

Q生「全然わかりません。すべて経理士さん任せですから。何なら、電話で聞きましょうか」(この忙しいのに、過ぎたことをいちいち憶えておれるかい。コンピューターじゃあるまいし)

署員「まあいいでしょう。しかし、自分の店の売上げも知らない経営主なんて、私も長くやっているが、これまで初めてですネ」

Q生「給料と家賃と印刷所への支払いさえ何とか済ませれば、そして借金があまり増えさえないければ、あとはどうでも良いのです」

署員「まあ、頑張つて下さい」

いつまでも税務署から見放されているのは、歴史物出版社のくせに、「過去」を大切にしないからであろうか。

いからであろうか。

1月×日 朝日新聞(山口版)に、随筆「二十五周年を迎えた読書グループつれづれの会」を書く。よくもまあ続けてきたものだ、我ながら感心する。

1月 日 『大内氏実録』完成。印刷、装丁とも小社にしては最高で、印刷所に最敬礼。六百部きつちりしか作らなかつたのが惜しまれる。

2月×日 近隣四市に古本屋は三軒だったが、昨年来、三倍増したらしい。しかし、自分なりにお客を大切にしているので、ライバルは一向に怖くない。有難いことに、店内はいつも古本屋らしくらぬ活況を呈しており、日曜祭日などは、朝から「満員御礼」である。

6月 日 この五、六月は、『熊谷五右衛門』『とくやま昔話』『防長四十八溪』『防長人物誌』と続いたのに、四点ともよく売れた。極小部数なので「火車」の炎を消すまでには至らぬが、この不況時に有難いこと。なかでも『とくやま昔話』は、ボランティア精神で売り歩いて下さる主婦もあり、初刷三千部は二週間

でなくなり、二千部を増刷した。

6月×日 『防長人物誌』には初めて「いつまでも長持ちする」という中性紙を使用した。しかしこの紙は、書籍用紙のようなキメのこまかい、しっとりとした味わいに欠けているようだ。

最近、マスコミの一部では「これまでの洋本は百年もたない」と騒いでいるけれど、古本屋に出てくる明治期の洋本は、言われるほど紙が劣化していないし、ケース入りの本などはびくともしていない。いずれにせよ百年も先のことより、今日この本を読んで下さる人達のためを思うと、中性紙は使いたくない。

7月 日 山口県地方史学会の三十周年記念に、会誌『山口県地方史研究』の15号を復刻して会員に原価提供することになり、その会誌へ一頁広告を二度も出した。

A5判九百頁の本を、予約会員へは五千円で提供するという、小社としては破格の大盤振舞にもかかわらず、予約はわずか三十人で、出版は延期となった。少なかった理由を考えると、

戦後の刊行物なので、持っている人が多

い。

雑誌だから、必要な部分だけをコピーすればすむ。

広告媒体としての『山口県地方史研究』の限界、等があげられる。

要するに、出版物過剰の昨今、よほど欲しい本が、売切れ、値上がり寸前のもので、しかもその本（あるいは注文用紙）が目の前になければ手を出さない、ということなのか。

7月×日 京都へ奈良本辰也氏を訪れ、『村田清風全集』復刻版への推薦文を依頼し、快諾を得る。

7月 日 上京。久しぶりに早稲田の古書店を巡るが、似たような本ばかり。珍本や売れ筋の本は、百貨店やスーパーの軒先へいき、店は倉庫なのだ。クーラーさえ入っていない店も多い。

7月×日 福岡、秋田などから旧知の出版人八名が信州の温泉に会し、Q生も末席を汚す。みんなそれぞれ活発な出版活動を展開しているが、全国的にみると地方出版は退潮期にあり、各社とも、今後の方針を模索しているようだ。「これからは、より高度に専門化した

出版社だけが残る。それには、直販を主体とした独自の販売ルートの開発こそ先決」との意見も多く、一周遅れのマツノ方式は、今やトップを走っているのかも知れない。

7月 日 夏休みに入り、山口県郷土誌をまとめて買う遠来のお客が目立つ。定休日の火曜に来られる方も多いらしく、申しわけない。7月×日 北海道大学の田中彰氏来徳され、有志と一席を設ける。広瀬豊氏の名著『吉田松陰の研究』を復刻することになった。

8月 日 五年がかりの『萩藩給禄帳』ようやく出来。現物を見て「なぜ千部刷らなかつた」との声多し。八百部は見込み違いだったか？

9月×日 京都の松籟社という出版社から『ちいさなちいさな出版者たち』という単行本への原稿依頼あり。五名の分担執筆とか。

東京のそうそうたる出版人の間にヤボ天の代表みたいなQ生が入るのは、いささかバランスを失するが、「ちいさなちいさな出版者」には違いないし、また「こんな出版社らしくない出版社もある」ということを知ってもらうためもあって、つい引き受けてしまった。

9月 日 日曜なので店に居ると、朝から、一般書や文庫、マンガなどを五箱、十箱と売りにくる（こちらが欲しい本であれば「来られる」と書くところだが…）。涼しくなったので、本棚の整理をするのだろう。昔は、年の暮れと梅雨明けに大掃除をしており、その頃が買入れのピークだったけれど、昨今は、学年末の三月と、暑さの去ったこの九月に移ったようだ。

10月 日 出版業界の停滞が伝えられている折から、県内の出版社の動きを眺めてみよう。まず、社長の交代した宇部の条例出版は、新たに四季出版という会社をつくり、出版と並行して、月刊の山口県出版文化情報誌「のんびる」（A5判24頁二〇〇円）の刊行と、県内各書店への県内出版物の卸売りという、労働多くして益のない（と思われる）二つの仕事を始めた。永續するだろうか？

今春、三十数年つづけた新刊店を他人にゆずって引退された山口の白藤孝亮氏は、「世間と縁切れになるのは寂しい」とかで、出版社の看板を新たにかかげる由、「文芸山口」をはじめ文化団体とも縁の深い人、これからも良

心的な出版を期待したい。

久賀の瀬戸内出版は、年一点のペースで進めてきた『歴史物語シリーズ』の周防篇全七巻を完結し、新たな飛躍を求めて模索中。

下関の新日本教育図書は、季刊誌『えとのす』など全国向けの出版で気を吐いており、一時活発であった下関の防長史料出版と防府の東洋図書出版は、しばらく休んでいる。

県内の自費出版はこのところ盛んで、それこそ、カラスの鳴かぬ日はあつても新聞に出版記事の出ない日はないくらい。

というわけで来年は、少なくとも表面的にはこれまでよりも活発になると思われる。小社はあい変わらず年七点のペースで硬い本を出していく予定。本命は、石川卓美氏畢生の大著『防長歴史用語辞典』である。

10月×日 松陰百科ともいふべきユニークな本『吉田松陰の研究』を復刻すべく、著者広瀬豊氏のご遺族を探していたが、ようやく見つけたり、交渉の結果、このほど首尾よく出版の許可を得ることができた。

10月 日 「マツノ通信」などDM二千通余りを発送。何年ぶりに県内と県外を分けてみ

たら、県外はずっと25%くらいだったのが、35%にふえていた。嬉しいことだ。

11月×日 今回の「防長人物特集」による売れゆきは、三年前の同じ特集に比べ、不況分を割り引いてもかなり落ちている。吉田松陰をはじめとする維新志士、政治家、軍人への関心が薄くなってきたとみえる。代わって、以前はさっぱりであった文化、教育関係の人物伝への要望が多い。山口県もようやく他県なみのパターンになったといふべきか。

11月 日 三か月ぶりに上京。神田の新店、古書店、出版社はいずこも同じ秋の夕暮れ。人だかりのしている雑誌コーナーも、動きが鈍ってきたらしい。

銀座のリクルート本社で、本邦初の出版社バーゲン・ブックフェア。タクシーをとばして駆けつけたのに、スクラップ寸前の本や特價市場から逆戻りしたようなものばかりで、まさに羊頭狗肉。客をバカにしている。

11月×日 初めて会津若松市を訪れ、活発な出版活動で知られる歴史春秋社の歓待を受ける。

山口県人への宿怨が今も残っていると聞い

ていたが、それはごく一部の人のだけのこと。

それにしても、白虎隊をはじめとする戊辰戦争の“悲劇”が、今や観光会津の“目玉”になつているとは皮肉なこと。行きは夕方、電灯一つだけのわびしい駅ばかりが目につき、暗い印象であったが、帰りは、車窓から見る磐梯山麓の錦繡が見事であった。

11月 日 三隅の平川喜敬氏から『村田清風全集』を百部も注文してこられた。地元の若い人たちへもPRしたとか。さすがは『村田清風 - その業績と感懐』の著者、打ち込み方が違う。

11月×日 今回の予約募集はその後も好調で、本日現在『村田清風全集』三三五部、『吉川元春』三〇〇部である。やはり良い本を出すものだ。小社の限定出版はここ数年、平均五百部以上を完売しており、このたびの二点も「予約売切」となるか？

昭和60年（一九八五）

2月 日 宮崎市でおこなわれた地方出版のシンポジウムに出席。

予想通り「停滞期」「曲がり角」等の声ばかり。こちらは何年も「火の車」で急カーブをあくせく登りつづけ、ようやく平坦な道に出たと思っっているのに……。

2月×日 朝七時に目が覚め、空港へ急ぐと九時すぎにはもう東京だ。正味一時間。徳山から宮崎へはほぼ一日かかったのに、宮崎の人は朝めし前には東京へ行ける。徳山は辺地だとつくづく思う。

2月 日 稀書『前原一誠伝』の著者 妻木忠太氏のご子息五郎氏に会い、復刻の許可を受ける。親の供養のためにも、ぜひ出したいとか。

午後、国学院大学へ米原正義氏を訪れ、大内・毛利・尼子の合戦を叙した史書『陰徳記』を、氏の校訂で刊行する話とまる。大著なので、完成は二年くらい先になる。

2月×日 電話帳にQ生の自宅の番号を載せ

るよう電電公社からすすめられる。しかし、家まで追いかけられるのは嫌なので、断わった。

2月 日 一週間かけて『出版ニュース』に、小社のダイレクトメール販売のノウハウを紹介した一文を草した。出版もしいに多品種小量生産となり、それに応じた販売法が模索されているのだ。それにしても、地方の超零細出版社のやっていることが、中央の関心を呼ぶとは痛快である。

2月×日 大雨の中を萩へ行き、前原一誠旧宅に孫の彦八氏を訪う。篤実そうな人である。『前原一誠伝』の復刻については以前から反対の意を表しておられたが、前原一誠の「復権」のためにも、本書の復刻が必要であること
を力説し、ついに了解を得る。彦八氏の気にしておられる「妻木氏が使わなかった史料」については後日、小社でまとめて出版することになる。新しい前原一誠像が生まれるかもしれない。

帰途、萩で長らく「前原一誠とその一党」の研究をしておられる松本二郎氏を訪れ、その未公開史料の編集をお願いする。「前原家に

きちんと残ってさえおれば、ぜひやりたい」とのこと。ついで氏の代表作『萩の乱』復刻の話もきまる。

3月 日 山口県が全国に誇る文化財「御国廻行程記」と「防長地下上申村別絵図」(以下略して「地下上申絵図」)復刻への要望が多い。たしかにこのままでは原図は痛むばかりだ。膨大な量なので、公の機関で復刻すべきだとは思っが……。

4月 日 二か月ぶりに上京。『毛利元就卿伝』の出版成功を祝して、萩毛利家の当主毛利元敬氏に、新宿で寿司を「ごちそうになる。

「毛利家の史料は、これからもマツノ書店でどしどし出版してほしい」と頼まれ、光栄の至り。そのほとんどは県民の財産として、山口県文書館に寄託してある。

4月×日 朝日新聞に連載中の「新人国記」に、大先生方にはさままれてなぜかQ生の写真が載り、全国各地のお得意様から、お祝いや激励の言葉をいただき有難いこと。

5月 日 「復刻希望アンケート」三六五通の上位五点は次の通り。

県文書館編『萩藩閥閥録』 妻木忠太著

『前原一誠伝』 米原正義著『中国史料集』

三坂圭治編『毛利史料集』 松本二郎著

『萩の乱』 欄外では『地下上申絵図』と『御

国廻行程記』への要望が多い。

5月×日 『萩藩閥閥録』『地下上申絵図』な

どの復刻許可申請を文書館へ出したところ、

『同書の復刻を含め、次期出版計画を慎重に協

議、検討しているため、当分のあいだ保留』

との回答あり。しごくもつともな理由にみえ

る。しかし、二年前、小社で復刻し、圧倒的

な好評を博した『防長風土注進案』のときも、

同じような理由で何と八年も待たされた。『地

下上申絵図』などは、閲覧されるたびに確実

に痛みがひどくなっている。原史料保存のた

めにも、一日も早い復刻が、多くの研究者か

ら待ち望まれているのだが……。

6月 日 内田伸著『山口県の石造美術』刊

行。クルマを持たない著者が、十五年かけて

県内全域を調査研究した貴重な記録である。

6月×日 梅光女学院大学主催のシンポジウ

ム「地域文化を考える」にパネリストとして

出席。地方出版に対する行政の無理解を訴え

る。

6月 日 徳山商工会議所の主催で『画文集

徳山の思い出』の出版祝賀パーティー。市内

の御歴史が三百名近くあつまり大盛會。

6月×日 妻木忠太著『前原一誠伝』の復刻

完成。一三〇〇頁の大冊、装丁も一誠の見事

な筆跡でびしりと決まり、重厚な雰囲気であ

る。しかし、予約は二八部とやや低調。

絶対に売れると思ってPRに手抜きをした

からか。明治維新、とくに士族の反乱やその

背景の解明には不可欠の一冊だ。気長に売っ

ていこう。

6月 日 古地図研究でも知られる山口大学

の川村博忠氏を訪れ、『地下上申絵図』につい

て伺う。

江戸中期の詳細な村別絵図が、県下全域

にわたって作成、保存されているのは全国的

にも希有である。

『地下上申』はすでに復刻されているが、

あれはこの「絵図」の明細書にすぎず、「絵図」

があつてこそはじめて生きるものであり、「絵

図」の復刻がないのは片手落ちである。

あまりにも膨大な史料であるため、取り

残されているが、研究。保存の両面から、早
急な復刻が望まれる。

以上の三点を力説しておられた。

7月×日 毎日新聞の読書欄に、先週の『山

口県の石造美術』に引き続き、今日は『画文

集 徳山の思い出』が写真入りで紹介されてい

る。

8月 日 『地下上申絵図』刊行についての問

い合わせ続出（長門市俵山温泉湯町福隅宏雄

氏ほか）。その筋にお願いして、強力に話をす

すめている。

全国の研究者、好事家から、最も刊行を

待たれている根本史料である。

閲覧のたびに進んでいく原本の傷みは、

これを復刻する以外に防ぐすべはない。

五千万円近くの経費がいると思われるが、

県の予算を使うわけでもなく、こちらの危険

負担でやるのだから、「民活」利用の最たるも

のであるう。

監修には、地図史研究の第一人者、山口

大学・川村博忠氏の了解を得ている

以上のような理由から、出版許可はぜった

いにとれると確信しているが、問題はそれか

らである。

8月×日 中国へ八日間の旅。初めて見る中国は思いのほか貧しく、出版物の水準も、日本の昭和二十年代後半とみた。

ひとり立ち寄った上海図書館での出来事。女性職員が利用者に本を渡すとき、ポンと投げ、本は一回転してカウンターに乗り、利用者は不審な顔もせず、それを受けとっていた。職業選択の自由がなく、本ぎらいの館員であるのが、これには少々がっかりした。

8月 日 『ちいさなちいさな出版者たち』というちいさな本が、京都の松籟社という、これまたちいさな出版社から刊行され、関係者だけの、ささやかな出版記念パーティが新宿で開かれた。

未来社、筑摩書房などという、日本の良心を代表する出版社の編集長を何十年もつとめていたような人達にまじって、よくもQ生みたいないなか者が選ばれたものだ、改めて感心する。

あつまった出版者は、それぞれ個性ゆたかで、人間的魅力にあふれ、すばらしい仕事をしてくられたのに、六十歳近くの社長の月給

がわずか二十万円と聞いて絶句。いつの世も、志の高さと収入は反比例するらしい。

あの新宿で六時間近く飲み、二次会もやったのに、会費は割り勘で一人六千円。まさに「貧なるが道に親しき」(道元)夜であった。

9月9日 毎日新聞読書欄のコラム「水位計」が、マツノ書店を紹介している。「返本に悩まされる大部数主義の見込み生産システムの対極にあるものを、小出版社の実践が照らし出している」とか。出版評論家の小林一博氏からも、共同通信のコラム「ほんの周辺」でほめて頂出し、『ちいさなちいさな出版者たち』による波紋が、あちこちに広がっているようだ。

9月×日 いなか古本屋の夏は、よく売れる割に、暑さのため買入れは少ない。秋風と共に本を整理する人もふえるものだが、この九月は、きびしい残暑のせいかさっぱりで、店も倉庫も空っぽになる。商品過剰時代にどうしたことかと思っていたところ、彼岸過ぎからクルマ一杯の仕入れが四回もあり、雑本とはいえ嬉しいこと。びっくりするほど温度計に左右される、意外にデリケートな商売なの

だ、

12月 日 東京から日本観光文化研究所の神崎宣武氏、四国の松山から『とくやま昔話』の著者向谷喜久江さん、同書イラストの島利栄子さん(徳山)の三名、小社へ集まっていたが、『よばい』のあったころ 証言・周防の『性風俗』の三度目の編集会議。郷土史や民俗学の欠落部分の掘り起こしだけに、ユニークな本になりそう。

12月×日 徳山にて二年ぶりに山口県古書組合の総会。この二年間に、県内の古本屋は四倍にふえていた。なかでも宇部市では一軒から九軒になった。それでも既存店の成績にはほとんど影響はないという。これは古本屋の潜在利用者の奥深さを実証する一例か、あるいはふえたのが、マンガ主体のデモシカ業者ばかりのせいか。

ちなみに、古本屋はふえたが出版社はへった。七、八年前の全盛期の約一割しか残っていない。県内だけではない。「地方出版の源流」とまでいわれた東北地方でも、ここ数年、激減しており、残った業者も経営は苦しく、来

年はさらにきびしくなりそつだといつ。

12月 日 京都の臨川書店が、広島、岡山両県の「郡誌」をまとめて復刻した。山口県にも攻めこんでくるかもしれない。緊急の迎撃態勢をとる。

12月×日 小野田市に高橋政清氏を訪れ、『厚狭郡史』の原本を二冊も貸していただく。

帰途、山口市の樹下明紀氏に『大津郡志』の原本を貸していただく。次いで三坂圭治氏を訪れる。稀本、『豊東村史』(重本多喜津編 昭和三年刊)の復刻をすすめられ、原本をお借りする。

12月 日 広島へ。市立中央図書館で広島県内における郡誌の復刻状況を調べる。同じ郡誌が四、五回も復刻されている。山口県ではまだ一回きりだ。『大津郡誌』のようにまだ復刻されていないものもある。郡誌以前に復刻すべき史料が多かったからであろう。

そこう百貨店の古書即売会へいく。格調高くないはずの百貨店の即売会も、いまや大衆化路線。入口付近はマンガに占拠され、全体に白っぽい本が目立つ。たくさん売るためには、こつこつという品揃えにならざるを得ないのだろう。

ついで市内の古本屋をまわる。このところ出版不況の影響が現われてきたのか、どこも将来に危機感をもっている。実際、新刊書店に並んでいる商品のうち、古本屋で評価されるものがどれだけあるというのか。数年をへずして大半はクズになるのだ。

行手をさえぎる黒い影。これは長年にわたるQ生の道連れであり、エネルギー源でもある。かつて二十年つづけた貸本屋時代もそうであった。古本屋へ転業したとき、この業界が一片の危機感も持たないことをふしぎに思っていたが、どうやら状況は一変したようだ。

12月×日 『防長地名淵鑑』や『防長造紙史研究』で知られる御園生翁甫氏が、昭和十年ごろ県立図書館へ寄託された大内氏の史料集『北辰飴光』は、楷書できちんと清書された原稿のまま文書館に眠っている。これは著作権が御園生氏のご遺族にあるので、先日、防府に遺族代表の御園生篤男氏を訪れ、出版の了解を求めたところ、即座に承諾を得た。わずかな十分間で話を通じ、気持ちが良い。